Dr. Earth for the

理論編

実践編

宇宙意識という視座

物質の系

生命の系

循環と共生の摂理

科学と経済の陥穽

オーガニック農法・農業編・畜産編

オーガニックで健康ライフ

地球のお医者さん

平井孝志

第二部　実践編

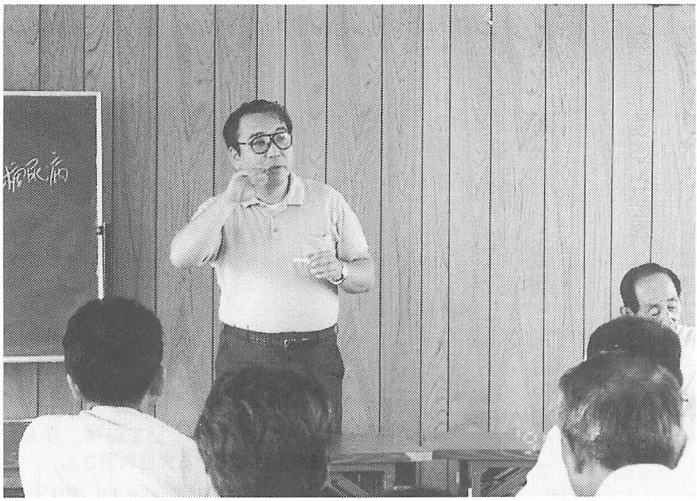
漢方無農薬農法で病を完治

病因を取り除けば病は治ります
予防すれば病にはかかりません
人も植物も同じなんです

漢方環境安全対策普及協会
主幹　星野　英明

急激に増えたアトピー

紀元前二二一年、広大な中国大陸を初めて平定した国が秦でした。その頃には既に漢方薬に関する文献「神農本草書」がまとめられていました（「本草」は薬用になる動植鉱物の総称）。「神農本草書」は三四七種類の薬物について記され、それらは薬物の起源から三種（動物性・植物性・鉱物性）、また薬物の機能から三種（上品・中品・下品）に分類されています。そうした悠久の歴史と人類の英知に支えられたのが漢方薬です。



漢方無農薬農法勉強会で講義をする筆者

私の本業は、栃木県にある漢方専門薬局「皇漢堂」の経営と調剤です。「漢方と農業がどうしてつながるんですか？」という質問をよく受けます。質問される方は、漢方の専門用語や漢文などが出て来るぞと待ち構えておられます。

「天使は至りて貴なり
天地は至りて富なり
彭粗（ほうそ）は至りて寿なり」
「寿を欲せば天地自然の理を知るべし」

というような説明から始めればそれなりにご満足いただけるのでしょうが、これといって難しい経緯などないのです。

感じていたことはあります。当店にお見えになる方はお身体の調子が良くない方がほとんどです。生まれてから病気と薬には縁がないとい

う方はめったに来られません。私たちが小さい頃には聞かなかったアトピー性皮膚炎という症状で来られる方が急激に増えました。

余命幾ばくもないおばあちゃんが無農薬米を食べて少し元気になったこともありました。アトピーの子供さんにも安全で滋養のあるものを食べるようにと言いたかったのですが、そのようなものを作っている方を存じませんでした。

「安全で安心して食べられる米や野菜はできないものなのかなあ」という素朴な疑問が、私を農地に向かわせたのです。

「病気は出ねえだがなア」と話すのは、漢方無農薬農法を実践している大鹿利明さん

漢方無農薬農法研究会というものを発足して約六年。この間に培った考え方を医療現場風に、診察・診断・処方・調剤・完治の順にアレンジしてまとめてみます。

診察——農薬と肥料への疑問

農薬の功罪と中身はさておき、「薬」という字がつくことから薬の一種として考えますと、

薬を必要としている状態は「病気」という範疇に入ります。通常であればご来店いただいて問診したり脈を診ますが、相手は物言わぬ農地と作物です。農地まで足を運び、農家の方から〝症状〟を伺いました。

その結果、症状として困っておられ農薬散布の原因となるのは主に次の二点です。

①作物の地上部、地下部の病害虫と病害菌

②水稲の除草

原因となる病害虫と病害菌の名前は次から次へとあがり、病気の名前ごとに使用する農薬が各種あることも聞かせていただきました。基本的には悪い虫がいるから殺す、悪い菌が広まらないように殺菌剤を散布するというものです。

「薬」が開発される前も農地で作物が収穫できたわけですから、本来はどれほども「薬」を必要としないはずです。それとも農地や農作物は本来、殺菌剤や殺虫剤に頼らないといけないものなのでしょうか。もしそうであれば、人間に例えるなら病弱な体質ということになりますから、体質改善から処方が必要です。

さらに〝問診〟を続けますと、「農地の食生活」が気になってきます。それは現代の農業従事者であれば誰でも知っていること、窒素、リン酸、カリなどに基づく肥料設計と呼ばれるもの

です。

科学者の研究結果に異論を唱えるつもりはありませんが、私たちの食卓にそのような元素成分に基づく献立があるでしょうか。「お父さん、今夜は窒素を五〇〇グラムも含んだご馳走ですよ」なんて言われたら、百年の恋も冷めてしまいます。

肥料設計の方法もさることながら、その量についても疑問を抱くようになりました。窒素は植物の必須元素でタンパク質に不可欠の成分です。しかし一般にいわれているような量を施肥する必要については疑問が残ります。

診断および処方——作物は「糖尿病」

〝診断〟を下す前に事実関係を整理しておきます。

①現在使用の農法および農業資材を使用していても農地と作物の病（毎年の病虫害）は完治していない。

②現在使用している「薬」については副作用＝人間と環境に対する毒性が否定できない。①と同様に、毎年使用しても完治していない。

③農地から流亡する肥料成分が河川湖沼の富栄養化の一因であったり、地下水の汚染を招い

ある農協が漢方無農薬農法を見学に来た。みな〝異次元体験〟にとまどっている様子

ているとする報告がある。

④人間の食事の献立はカロリー計算も含まれる。

⑤収穫した作物は、食養生のための素材として推薦できるほど安全と言い切れない。

以上のようなことから、次のように診断します。

①現在使用の農法、資材、「薬」では今後も病を完治できない。

②「農地の食生活」が適していない、または、間違っている。

③診断結果を人間の病名に例えれば「糖尿病」となる。

したがって、次のような処方が必要です。

①より良い農法と資材を採用する。

②現在まで使用している「薬」を、病が完治できるような「薬」に変更する。

③「農地の食生活」をカロリー計算を含めて再考し改善する。

調剤——漢方無農薬農法

窒素過剰の施肥は作物内部のバランスを崩すと考えます。窒素肥料を用いれば葉の緑は濃くなります。緑色が濃い野菜は消費者に好まれる傾向があるそうですが、それは自然本来の緑ではなく、病的な緑色なのです。そのような施肥過剰の土壌や作物には病害が寄ってきます。高栄養のものを食べ続ける人が高血圧や糖尿病になりやすいのと同じです。

立場を変えてみますと、虫たちは子孫繁栄のために農地や作物を選びます。今にも枯れそうな植物や何ものも寄せつけない健康さを持つものよりも、高栄養でしかも病の気配がするものを選ぶでしょう。

一方、漢方の生薬の中には独特の香りを放つものが多くあります。強い芳香を放つ薬草には虫が寄ってきません。「良薬口に苦し」といわれますが、虫たちにとっても美味しく感じられないのでしょう。

そのような芳香を圃場全体や作物に振り撒けばどうでしょうか。体臭を隠すための香水のような働きをするのではないでしょうか。このような考え方から生まれたのが、漢方生薬を一六

種類配合した「花蓮花」です。

花蓮花は水で五〇〇～一〇〇〇倍に希釈して散布します。私たちの嗅覚ではわからないほどの香りですが、虫たちにはわかります。香りだけでなく、雰囲気や波動といった、人間の感覚外のもので知るのだと思います。

水稲の除草には「芒硝」と「ボレイ末」を調合したＢＴ錠で対応しています。

施肥には「煮たもの」「焼いたもの」「完熟したもの」しか使いません。生のものや未熟なものを施用すると病害虫が発生しやすいからです。施肥の中心は、漢方薬を作る過程で生じる「煎じ残った生薬」（漢方煎じ滓）です。サンバースも欠かせません。

畑作であれば「煎じ滓」とサンバースを三坪に一袋ずつ。それも畝の部分だけの施肥ですから、一反の畑でもそれぞれを二〇～三〇袋入れるだけです。漢方生薬をごくわずかしか使いませんので、人体や環境を傷める心配がありません。

窒素の量を計算しますと、一般にいわれている必要量よりも少ない数値になります。数値としては満足な収穫ができるようなものではありませんが、実際には漢方無農薬栽培で慣行農法に勝るとも劣らない収穫高になります。

無農薬で元気に育った根

完治――安全で安心できる作物

漢方無農薬農法研究会発足当時は、誰も無農薬で栽培ができるとは信じていませんでした。今でも勉強会に初めて参加される方の多くは眉、つばと感じておられるのではないでしょうか。研究会発足から約六年、その間には平井先生にもご講演いただいたり、多くの方々のお世話になりました。お陰様で現在では漢方無農薬農法を実践される方が全国で二〇〇人を超えるまでになりました。

農場からは、それまで欠かせなかったはずの「薬」が消え化学肥料が無くなった、という報告が年々増えてきています。そのような農場では、薬剤散布時に子供を家の中に閉じこめることも防御マスクも必要なくなりました。病害虫

の被害からも解放されたのです。そして作物は安全で安心できるものとなりました。

病は完治したのです。

完治した農地からは、どこの誰が食べようとも、遠くに嫁いだ娘が食べようとも、孫が畑から直接食べようとも、食べた方の滋養になる作物が生み出されます。私も食養生をされる方に「このような野菜が販売されていますよ」と推薦できるようになったのです。

流通価格は決して高くはありません。資材、手間、安全性、収穫量、収穫期間などを考えても、従来の農法と同じ程度か逆に安いコストで済んでいます。化学肥料と農薬を使ったものと同じ価格で流通しても不思議ではないのです。

病気には原因があります。それが食生活であったり、不摂生であったり、精神的なストレスであったりと、原因はさまざまです。それらが何らかの形で身体に悪影響を及ぼした状態を「病気」と呼びます。

漢方では、病気になる前の状態を「未病（みびょう）」と呼びます。未病の間に、食生活や生活態度、適度な運動などを通して健康を維持し増進します。健康が維持できれば病気にはなりません。

未病や病気にならないよう予防することは農業でも同じです。未病の間に飽食や過食を避けること、過剰なストレスを与えないことを心がけて、健全に育っていただくことが大切だと考えます。

ご注意

1　掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。

2　リンクはどのページでも確認不要です。

3　商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。

4　本サイト に掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。

Copyright 1997-2047. "Copyright Yoshinori Hirai ". All rights reserved.
Never reproduce or republicate without written permission.
微生物的環境技術研究所　http://www.bikanken.com/